

# 室蘭民報

MUROMIN

2014年（平成26年）

6月24日（火）

発行所：室蘭民報社

〒051-0015 室蘭市本町1丁目3-16

電話0143-22-5121 FAX0143-24-1337

©室蘭民報社2014

編集局・報道 / (0143)22-5123

営業局・営業 / (0143)22-5122

ご購読・チラシの申し込み

販売局・販売 / (0143)22-5121

チラシセンター / (0143)22-2454

ホームページ

<http://www.muromin.mnw.jp>

**緑豊かな庭づくり**  
花と緑の空間は快適環境を創造する  
造園・緑化・園芸・土木工事の設計、施工  
樹木・草花  
庭土・芝生販売  
事務所：電話 83-1712（昼間）  
出張先：電話 46-4785（夜間）  
総合造園建設業  
株式会社 **丸栄 小笠原園芸**

■きょうの紙面■  
**絶滅危惧クジラ確認 15**  
絶滅危惧種のナガスクジラとみられる親子の個体が、噴火湾を回遊していたことが分かった。噴火湾海洋生物調査員の笹森琴絵さんは「浅い水深の沿岸や閉鎖域での観測は極めてまれ」と解説する。  
東邦大医学生2人が実習2

## 「光熱費ゼロ住宅」実証へ

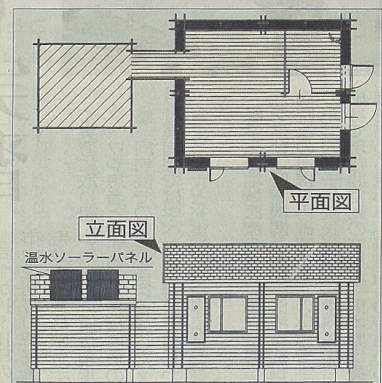
室蘭・サンパックス



サンパックスの泉澤直輝社長（左）と泉澤高光会長

### 実験棟9月までに整備

ログハウス製造・販売、木材加工のサンパックス（室蘭市、泉澤直輝社長）は、暖房や給湯、照明などの光熱費分のエネルギーを太陽光など再生可能エネルギーの活用で賄える高気密・高断熱住宅の実現に向け、9月までに実験棟を構築し実証試験に乗り出す。熱損失の大きい壁に着目し、コスト的に困難とされた厚さ250ミリ（栗島睦浩）



を確保 効果を実証する。同社は25年前に太陽光集熱パネルの熱平均70度の温風が得られるシーブス（種）技術を確立したが、当時は断熱材や窓ガラスの熱損失が大きく、住宅に循環させる方法がなかった。住宅機能の核となる①は、熱損失が最も大きいもののコスト高で厚くできない断熱材を、独自のダブルログ工法で壁断熱厚を200×350ミリの範囲で自由に選択できるなど、技術が生きる環境が整ってきた。これら自在技術を組み合わせて、熱損失を抑えた上で従来の外断熱工法に比べ、施工の省力化、短期化を図る。構造柱の内側の空間は付加断熱が可能で、配管や配線、空気ダクトを通して室内に40、50度の温風を送れる。外壁と内装壁には道産材を活用。専門職でなくとも自分で建てられるセルフビルド化のコア工法となる。

【ネット・ゼロ・エネルギーハウス住宅性能の向上と太陽熱などの活用により、エネルギー消費量を差し引いてゼロにできる家。高コストのため、現状は普及・導入には国の補助金頼りの面が強い。道内での実現にはハードルがある。戸建て住宅の総エネルギー消費量（照明、給湯、暖房、冷房）の統計で、北海道は関東以西の地域と比べ約1.8倍消費しており、中でも北海道は暖房エネルギーの割合が67%を占める。サンパックスは保有技術を組み合わせ、道外主要5都市の平均エネルギー消費量に相当するレベルへの低減を実現させた上で、低コストで簡易な新施工法の提案を目指す。

### 厚壁化図り 太陽光活用

同社が目指すのは、光熱費が差し引きてゼロになる低コストのネット・ゼロ・エネルギーハウス。今年9月までに、白老町に実際の標準的住宅（100平方メートルの4分の1、25平方メートル）の実験棟を整備。10月中旬から来年3月までに各種データを収集する。実験棟には①断熱効果が高い500ミリの厚い太陽熱利用の温風送風システム②地下水や温泉廃熱など地中熱を利用した暖房・給湯設備（ヒートポンプ）③太陽熱集熱給湯システム（スプリット方式）④太陽光発電パネルの地上設置などを盛り込み、それぞれ性能

を盛込み、それぞれ性能を確保する。同社は東日本大震災で被災した陸前高田市で、ログハウスによる図書館再生プ

プロジェクトを手掛けた。わずか6日で基礎から内外装などすべてをボランティアが構築。セルフビルドを実践しており、今回の開発でこの工法を確立させ、建設業界の人材難の解消も狙う。

同社の泉澤高光取締役会長は「北海道には暖かく燃料代のかからない家が必要。長年の実績と技術の蓄積で事業化に弾みをつけたい」と強調。このプロジェクトは700万円程度の事業費を見込み、壁の独自工法事業化の試みは室蘭テクノセンターのものづくり創出支援事業に採択された。